巻頭言

石川看護研究会への展望

金川克子

ナイチンゲールが看護とは患者の生命力の消耗を最小にするように整えることを意味すべきであるという明晰な定義をして以来、看護についての考え方が特に欧米を中心に盛んになってきています。

さまざまな領域の学問が発展していく中で、看護学も実践科学として発展することが必要でありましょう。

ところで、わが国に於いて、ここ20数年以来、日本看護協会主催の日本看護学会をはじめ、看護に関する学会や研究会ができ、よい看護にむけての活動報告や研究成果の発表、討論が盛んになってきています。また今年度は日本に初めての看護の大学院（博士課程）ができるなど看護界にとって画期的な年でもあります。

さらに、最近では他領域の理論の活用を図りながら、看護が基盤とする理論—例えばニーズ論、適応理論、セルフケア理論等—の構築への歩みもみられます。

看護の基本的な考え方はナイチンゲールにあるとしても、当時に比べて疾病像の変化、医療技術の進歩、生活環境の変化など多くの条件において時代的変遷があり、看護の対象の拡がりや看護の方法に進歩がみられ、社会からの要請も増大していると思われます。

私達は、看護のよき先人の考え方を学びとりながら、目の前の患者に、現在の患者に役立つ看護のあり方を追求すると共に、将来を見通せる看護職を志向したいと思います。

当石川看護研究会は、昭和58年に看護の実務ならびに教育に関する諸問題について研究し、その発展に寄与することを目的に発足したものであります。

年々看護研究が盛んになる中で、病院や地域等の現場での看護活動が科学的基盤に立って展開できる様に、看護の視点に立った看護研究を意図したいと思います。即ち、実践の場での看護が一回の経験の中でうもれてしまわないで、次の看護に生かせる部分を導き出せる様な視点で検討したり、またある新しい看護の工夫が一般的に有効であるかの検討など、日頃の実践活動を研究的視点で把え、研究成果にし、それを実践活動に環元していくとり組みが大切と思います。

この研究会が看護の実践に役立つと共に、看護学の発展に寄与できるように育くんでいくことを願うものです。